

応答詞 okay のイントネーションによる使い分けと機能

木村 英莉子

京都大学大学院

kimura.eriko.87v@st.kyoto-u.ac.jp

キーワード：会話分析、話し言葉、ドイツ語、応答詞、イントネーション、映画言語

1. はじめに

本稿では、(i) 言語使用における話し手と聞き手の語句の使い分けについて考察すること、(ii) 自然発話と台詞として作り出された映画における言語使用の差異を考察することを通して、即時性に関連した話し言葉の自然さについて議論することを目標とする。ドイツ語における応答詞 okay を対象とし、イントネーションの差異について、その使い分けの要因と機能を明らかにする。話し言葉とは、「不完全性／冗長性が許容され、発話時の状況、話し手の感情表現が現れる 1 回限りの相互的な発話」と定義される (Ochs 1979, Chafe 1982, 工藤ほか 1995)。執筆者は映画などのように、話し言葉を作成した際に現れる作為性、すなわち即時性の喪失に着目し、okay の使い分けにどのような影響が出るかを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。まず 2 節で本稿の背景と目的について述べ、3 節で自然発話の分析、4 節で映画言語の分析を行い、okay について両イントネーションの機能を考察する。5 節では、使用目的と作為性の有無による違いに着目し、両者の違いがなぜ生じるかを検討する。6 節はまとめと今後の展望である。

2. 背景と目的

独独辞典の Duden に従うと、okay の意味は、„abgemacht, einverstanden (承知した、同意／了解／賛成)“ である。話し言葉において okay は、話し手から聞き手への理解、了承を「暗示的に」「符号化」して表す語である (Deppermann 2009: 229)。すなわちこの応答詞 okay は話し手から聞き手に対する意思伝達を行う際に使用される語である。3 節でみるように、okay は二種類のイントネーションを用いて表出されている。イントネーションは、その違いによってその文の文法性や意味が変わるなど、話し手によって有意味に使い分けられ、コミュニケーション上で大きな役割を果たす (Pheby 1980: 37, 46)。しかしながら、ドイツ語の okay については、イントネーションによる使い分けについて詳しく研究はなされていない。

本稿では、ドイツ語で、話し手の意思表示が表される応答詞 okay を対象とする。話し手と聞き手の言語使用と反応から、話し手の発話内容と聞き手への態度に着目し、イントネーションの差異によってどのような使い分けがなされているのかを考察する。使い分けを確認することにより、言語使用における意思伝達の仕組みを解明する足がかりとするこ

とができるのではなかろうか。

本稿ではさらに、自然発話におけるこの考察と、映画における *okay* の使い分けを比較し、使用目的と使い分けにどのような違いがあるかを確認する。以上を通して、映画言語における話し言葉としての不自然さの所以を探ることにより、話し言葉の自然さについて考察する。

3. 自然発話での *okay* の使い分け

本節では、自然発話における応答詞 *okay* について、イントネーションの差異による使い分けを考察する。表出された *okay* のイントネーションの種類を確認したところ、上昇イントネーションと下降イントネーションの2種類が存在することが判明した。

3.1 収集方法と分類方法

言語資料は、自然発話と映画の二種類それぞれに当たるものを使用した。自然発話としては、インターネット上で使用できる電話会話のコーパスである *Callfriend* のドイツ語版を用いた。*Callfriend* とは、ドイツ人の友人同士の電話における会話を録音したものであり、会話は大部分がドイツ語で行われている。30 分間の会話を録音し、その分の料金を録音者が支払うという形式を取っており、会話はその説明から始まることが多い。*Callfriend* から抽出した文例を、イントネーションと働きという二つの観点から分類する。

3.2 分析結果

言語資料から収集した文例における、*okay* のイントネーションの差異から、その特徴を捉える。*Callfriend* からは、無作為に抽出した 19 本の会話、合計約 8 時間分を対象とした。ここから、上昇イントネーションが 9 例、下降イントネーションが 37 例の計 46 の文例が見つかった。

すでに 2 節で述べたように、*okay* は「承知、同意、了解、賛成」の意味を持ち、聞き手からの働きかけに対する話し手の反応として使用される¹。この特徴を考慮し、本稿では、*okay* によって話し手がどのような反応を対話相手に伝えているかという観点から、収集した文例を確認し、以下の三種類の働きに分類した。

- I. 聞き手の発言の了承
- II. 聞き手の発言の受容
- III. 準備完了の伝達

まず、I - III の働きについて、文例を挙げながら説明する²。

3.2.1 聞き手の発言の了承

第一のタイプとして、聞き手からの要求を話し手が了承する働きがあると考えられる。

この働きを持つ okay は、聞き手からの依頼、指示などの強い働きかけに対し応じる場合に用いられる³。

(1) [Callfriend 4499]

01 F: Ja.

yes

02→E: >Und da habe ich< gesagt, „O ↑ kay, ich

and there 1SG-have-Pres I-nom say-p.p. okay I-nom

03 würde das mitmachen“ und dafür bekommen wir ‘ne

1SG-aux-Fut-Conj2 it-acc do together-Inf and for that 1PL-receive-Pres we-nom a-acc

04 halbe Stunde ‘n freies Gespräch.

half hour a-acc free conversation

F: うん。

E: それで私は言ったの。「分かった、私も一緒にやるわ」って。それで、30分、自由に話す時間をもらったの。

(1) では、E が F に、実験に協力するに至った経緯を説明している。電話会話を録音するという実験に協力することを依頼された E が、状況説明の中の台詞として、02 行目で依頼を了承するために okay を使用している。I の働きは、このように、聞き手からの要求を了承する際に okay が使用されているものを指す。

3.2.2 聞き手の発言の受容

聞き手の発言をどういったものであれ受け入れる働きである。I のように聞き手からの指示や依頼といった話し手への強い積極的関わりのできる了承でなく、単に相手の発言を受容したことを表す。この働きは相槌に近く、対話相手の発話内容を聞き取ったことを表すために使用される。ここには、聞き手に対して話し手が質問をした後で得た、聞き手の答えに応じる働きも含まれる。

(2) [Callfriend 4525]

01 G: Also, >jetzt kann man< sogar über Waffenschmuggel

that is now 3SG-can-Pres man even over gun-running

02 und Mädchenhandel unterhalten.

and women traffic talk-Inf

03 G: [hehehehe] [hehehehe]hehe

04→H: [Ah,ja. O ↓ kay.] [huhu]

ah yes okay

05 H: Und wie geht's bei dir?

and how 3SG-go-Pres it by you-dat

06 G: h::h Ja du, Ich bin eigentlich schon fleißig,

yes you-nom I-nom 1SG-be-Pres actually already hard

07 am Koffer packen.

on the-dat trunk pack-Inf

G: つまり、武器の密輸のことでも婦女売買のことでも話せるんだね。あはははははは

H: ああ、うん。分かった。

H: で、元気なの？

G: ふー、うん。実は、荷造りをしているところなんだ。

(2) ではこれからの何を話すかについて聞き手が冗談を言ったのに対し、話し手が okay と告げている。このようにⅡは、聞き手の発言をどういったものであれ受容する働きである。

3.2.3 準備完了の伝達

会話を始める、終わるなど、話し手が会話の区切りを示す働きである。Ⅰ、Ⅱと異なり、聞き手からの発話に対する話し手の反応ではなく、話し手の自発的な発話である。

(3) [Callfriend 6136]

01 T: Wartest du mal kurz? ((英語で他の方向に向かって話しかける))

2SG-wait-Pres you-nom mod short

02 T: Thank you.

03 U: hh.

04→T: O↓kay

okay

05 U: [hehehehehehe]

06 T: [Here we go, again.]

07 U: hehehehehe.

08 T: Nicht zu glauben.

not to believe-Inf

09 (1.0)

10→T: h: ((ため息)) Na, o↓kay.

well okay

11 U: Ja, ja.

yes yes

T: ちょっと待って。

T: ありがとう。
 U: ふふ、
 T: オッケー。
 U: はははははは
 T: 話しましょう、もう一度。信じられない。
 T: ふー、ね、オッケー。
 U: うんうん。

(3)では T が 01 行目で会話を中断したが、また会話を再開できることを 04 行目、また 10 行目で okay を用いて告げている。このように、話し手が話を始める、終わらせる契機として使用され、発話の準備完了を伝える際に使用されている。

3.2.4 働き別のイントネーションの使い分け

I -IIIの働きに対し、上昇イントネーションと下降イントネーションが使用される状況から、それぞれの特徴を述べる。以下表 1 に、働き毎の文例数をまとめる。

表 1 働き別の okay 文例数

	I	II	III	計
上昇イントネーション	3 例	3 例	3 例	9 例
下降イントネーション	9 例	22 例	6 例	37 例
計	12 例	25 例	9 例	46 例

全ての働きに対し、上昇イントネーションと下降イントネーションが使用されている。したがって、これらの働きのような、話し手と聞き手の表面上の反応のみから使い分けを分類することはできず、ここからイントネーションの使い分けがなされているわけではないことが分かる。このため、それぞれの働き毎に、イントネーションの使い分けがどのように異なるのか考察することで、イントネーションの使い分けの実態をより詳細に観察する。その上で、それぞれのイントネーションが全ての働きにおいて共通して持つ会話上の機能を考察する。以下、働き毎に文例を挙げながら、イントネーションによる差異を確認する。

I. 聞き手の発言の了承

(1) (再掲) [Callfriend 4499]

01 F: Ja.
 yes

- 02→E: >Und da habe ich< gesagt, „O ↑ kay, ich
 and there 1SG-have-Pres I-nom say-p.p. okay I-nom
- 03 würde das mitmachen“ und dafür bekommen wir ‘ne
 1SG-aux-Fut-Conj2 it-acc do together-Inf and for that 1PL-receive-Pres we-nom a-acc
- 04 halbe Stunde ‘n freies Gespräch.
 half hour a-acc free conversation

F: うん。

E: それで私は言ったの。「分かった、私も一緒にやるわ」って。それで、30 分、自由に話す時間をもらったの。

(4) [Callfriend 5843]

- 01 P: Sven, warte mal, ich versuch grad mal den Karl
 Sven wait-Imp mod I-nom 1SG-try-Pres just mod the-acc Karl
- 02 einzuschalten, [ja?]
 call in-Inf tag question
- 03→Q: [O ↓ kay.]
 okay
- 04 P: Dann kann der mitreden. Ich glaub nämlich,
 then 3SG-can-Pres the-nom talk together-Inf I-nom 1SG-think-Pres namely
- 05 dass der jetzt unten in seinem Zimmer ist. Es
 that the-nom now under in his-dat room 3SG-be-Pres it-nom
- 06 dauert so zwei Minuten ungefä: ↑ hr?
 3SG-last-Pres so two minutes about
- 07→Q: Ja o ↓ kay .
 yes okay
- 08 P: Sekunde,
 moment
- 09 Q: Jo, jawohl
 yes certainly

P: スヴェン、待って。カールも電話にいれられるようにするから。ね？

Q: 分かった。

P: それで彼も会話できるわ。下の自分の部屋にいると思うの。だいたい二分くらいよ。

Q: うん、分かった。

P: 待ってね。

Q: うん、了解。

(1) では上昇イントネーションが使用され、会話を録音する実験に協力することに対し

て okay で了承している。(4) では下降イントネーションが使用され、会話している電話の中で、P と Q の共通の知り合いである第三者 (Karl) を電話に参加させるために待つほしいという P の要求を Q が了承している⁴。これは P から Q に対する明確な指示であり、また、Karl と Q は (4) の発話以前に会話をしており、名前呼び合う間柄である。

(1) で了承されている実験は協力を依頼されているため、断ることは話し手の自由意思に従うが、(4) では共通の知人で、しかも既に親しく会話をしている相手が電話に参加することを断るのは、参与者両者にとって好ましくないことであると言える。このように、(1) の上昇イントネーションの okay では、話し手が依頼された内容に対し自由意思で決めることを了承しており、(4) の下降イントネーションの okay では話し手が聞き手から強制される指示を了承していた。

他の文例においても同様に、上昇イントネーションの okay は、子どもの我儘を聞き入れるなど、「決定権が話し手にあり、聞き手からの依頼、頼みを了承する」時、下降イントネーションの okay は、「決定権が聞き手にあり、聞き手からの指示を受け入れる」時に使用されていた。

II. 聞き手の発言の受容

(5) [Callfriend 6136]

01 U: Na ja.

well yes

02 T: Na ja, toll. hh

well yes nice

03 (0.8)

04 T: Abe::r, ahm, also in den, den, Dingen, was ich davor
but ahm thus in the-dat the-dat things what I-nom before that

05 gekriegt habe, haben sie abergeschrieben, (0.5)ahm(0.6) =
get-p.p. 1SG-have-Pres 3PL-have-Pres they but write-p.p. ahm

06 da:ss, (0.9)ahmmit Namen und so vertraulich [umgegangen wird.]
that ahm with names and so confidential deal-p.p. aux-passiv

07 U: [Hm hm hm]

h'm h'm h'm

08→U: Na ja. O↑kay.

well yes okay

09 (1.5)

10 T: Also ich meine, was, was wollen sie dann
that is I-nom 1SG-mean-Pres what what 3PL-want-Pres they-nom then

11 veröffentlichen?

publish-Inf

U: ええと、

T: うん、素敵ね。

T: でも、ええと、つまり、もらったのには書いていたけど、あー、えーと、名前は信用して扱われるって。

U: うん、うん、うん。まあね、わかった。

T: つまり、思うに、何を公にするつもりなの？

(6) [Callfriend 6060]

01 S: Ja:? [Die hab ich kennengelernt.]

yes the-acc 1SG-have-Pres I-nom get acquainted-p.p.

02 R: [Mit der ich früher zusammen,]

with the-dat I-nom earlier together

03 R: Ja? Hm-hm?Die:: hat uns zum Abendessen eingeladen,

yes hmhm the-nom 3SG-have-Pres we-dat to the-dat dinner invite-p.p.

04 und da hatte ich ihr ja gerade davon dieser Sache

and there 1SG-have-Past I-nom she-dat mod just of it this-dat things

05 erzählt, und da sagt sie „ ↑ Ach da ruf doch

explain-p.p. and there 3SG-say-Pres she-nom ah there call-Imp mod

06 sofort an!“ und so, dann habe ich, bin ich

immediately on and so then 1SG-have-Pres I-nom 1SG-be-Pres I-nom

07 jetzt hier und,

now here and

08 (0.7)

09→S: O ↓ [k ↑ ay]?

okay

10 R: [da hab] ich dich also jetzt angerufen.

then 1SG-have-Pres I-nom you-acc thus now call-p.p.

S: うん、私たちは知り合ってるわよ。

R: 前、一緒に、うん？ そうなんだね。それで、僕は夕食に招待されて、そこで、このことを話したんだ。で、「今すぐしなきゃ」って言われて、で、今ここにいるんだ。それで、

S: 分かったわ。

R: で、電話したってわけ。

(2) (再掲) [Callfriend 4525]

- 01 G: Also, >jetzt kann man< sogar über Waffenschmuggel
 that is now 3SG-can-Pres man even over gun-running
- 02 und Mädchenhandel unterhalten.
 and women traffic talk-Inf
- 03 G: [hehehehe] [hehehehe]hehe
- 04→H: [Ah,ja. O↓kay.] [huhu]
 ah yes okay
- 05 H: Undwie geht's bei dir?
 and how 3SG-go-Pres it by you-dat
- 06 G: h:::h Ja du, Ich bin eigentlich schon fleißig,
 yes you-nom I-nom 1SG-be-Pres actually already hard
- 07 am Koffer packen.
 on the-dat trunk pack-Inf

G: つまり、武器の密輸のことでも婦女売買のことでも話せるんだね。あはははははは

H: ああ、うん。分かった。

H: で、元気なの？

G: ふー、うん。実は、荷造りをしているところなんだ。

以上の文例はすべて、対話相手の依頼など積極的な働きかけはないものの、対話相手の発言を受け入れ、それに応じて *okay* を発話していることから、対話相手の発言を受容する働きを持っているといえる。(5) では話し手が会話の録音が公開されると笑いながら話した後で、U が個人情報の取り扱いについて不信感を示し、T と問答した後に、そのコメントに対して話し手が上昇イントネーションで *okay* と告げている。(6) では会話の録音のために R が S に電話をかけた経緯について説明しており、R が自身の妹に会話の録音について話した際に、興味を持った妹に今すぐに電話をするように頼まれ、S に電話をしたということを説明している。R の説明を聞いている S がそれに応答するために、下降イントネーションで *okay* を使用している。(2) では会話の録音について説明を受けた後に、これから話す会話の内容について G が、倫理的に話すべきではないことについても話してよいのかと冗談を言ったのに対し、H が下降イントネーションで *okay* と告げている。

(5) では、話し手は、自身の発話に対する聞き手の批判的な反応の後に *okay* を使用し、聞き手の批判を受け入れ、それ以降には長時間の間が空いている。対して下降イントネーションの使用される (2) では、話し手の H は G の冗談を受容して *okay* を告げており、その後、話し手と聞き手は笑い声をあげている。(6) でも *okay* を用いることで聞き手の話を受容し、その後、聞き手が話を続けている。

上昇イントネーション *okay* について詳しく論じるために、(5) の状況について詳述する。この発話 (5) の行われる直前に、U は会話録音について T が「公的に公開される」と発言

したのに対し、間を多く開け、不信感を表すように疑問形を用いて U の発言を繰り返している。(5) で U は、T の説明に対し、個人情報保護の観点から反論し、T はその批判に対して黙っている⁵。その際、それまで大きな笑い声を発し、比較的、大きな声で矢継ぎ早に話していた U が声を小さく、低くしている。低音の声は、非積極的な感情を表す場合が多い (森ほか 2014: 6)。したがって、ここでは話し手が聞き手の発話内容に対し積極的な会話参与を行っていないことが分かる。ここで U は、okay を用いて受容を示すものの、07 行目で素早く相槌を打つなど、話し手が聞き手の話を続行して聞くことを避けている。

また、言語資料から見つかった II の働きで上昇イントネーションが使用される他の文例には、聞き手が説明中に導入した人物について、話し手に思い出させようとする人物について説明し、それに対して話し手が、„Ah, o↑kay.“ と、上昇イントネーションの okay を用いて応答しているものがあつた。„ah“ は、ここでは「納得、感嘆」などを表しており、話し手が聞き手から説明を受けた人物について理解したことが表されている。話し手にその人物について思い出させるために聞き手が言葉を重ねていたことから、ここでは、話し手自身の理解を示すことが重要であるといえる。

上昇イントネーションの okay が使用されるのは、話し手が会話に積極的に関与したくない内容について発話するときや、話し手が理解しておらず、聞き手が話し手に提供した情報に対し、話し手の理解を明言することが重要である時であつた。対して下降イントネーションの okay が使用される文例では、話し手が受容する内容が話し手に害はなく、受け入れが簡単に可能である内容について議論していた。したがって、上昇イントネーションでは、話し手が理解を示す時や、話に参加したくないことを態度に表しているときなど、話し手の積極的な意図があり、話し手の意見が重視され、下降イントネーションでは聞き手の話を続行させ、話し手が聞く体制にあり、聞き手の意見が重視されるといえる。

この用法の中には下位分類として、以下の文例 (7) のような「聞き手の応答を確認し、後続発話を行う」働きが存在する。この働きは、下降イントネーションにのみ見られた。

(7) [Callfriend 4499]

01 E: Bist du wieder da?
2SG-be-Pres you-nom again there

02 F: Ja.
yes

03→E: h O↓ [kay],
okay

04 F: [hahahaha.]

05 E: Hast du die Message auch gehört?
2SG-have-Pres you-nom the-acc message also listen-p.p.

E: 戻ってきた?

F: うん。

E: オッケー。

F: あははは。

E: メッセージも聞いた？

(7) の 01 行目では、E が電話をかけた時に、F が答えなかったために、F がいるかどうかを確認している。それに対する F の肯定の返事を聞き、E が下降イントネーションの **okay** を使用して答えている。こういった働きを **okay** が担う発話は 12 例あり、これらの文例には全て、下降イントネーションの **okay** が使用されていた。II の下降イントネーションのうち、約 52% をこの下位分類が占めている。ここでは、聞き手の発話、応答をもととして話し手が発話を行い、**okay** は、聞き手の応答を話し手が受容したことを表している。この **okay** は、聞き手への反応として使用されている。これらが上昇イントネーションに使用できないことから、下降イントネーションの **okay** が使用されている場合は聞き手の意見が重視されていることが分かる。

III. 準備完了の伝達

(8) [Callfriend 1672]

01 D: Ja dann, ° ja°
yes then yes

02 (1.5)

03 C: Na: ja.
well yes

04 D: Ja, [ich]
yes I-nom

05→C: [O ↑ kay!]
okay

06 D: Ja [Sagst du dem]
yes 2SG-say-Pres you-nom the-dat

07 C: [Der Hugo] wird sich dann demnächst mal
the-nom Hugo 3SG-aux-passiv-Pres himself then in the near future mod

08 melden,
get in touch-Inf

09 D: Ja, [schöne] Grüsse und wie gesagt,
yes nice greetings and as say-p.p.

10 C: [Ja,]
yes

11 C: mache ich.
1SG-make-Pres I-nom

D: うん、

C: ええと、

D: うん、僕は、

C: オッケー！

D: うん、言っておいて、

C: ヒューゴが次の連絡をするわ、

D: うん、よろしくね。

C: うん、そうするわ。

(9) [Callfriend 4312]

01 AC: Oh, jetzt muss ich Schluss machen ahm
oh now 1SG-must-Pres I-nom end make-Inf ahm

02 (0.4)

03 AD: Ja:. [Ich muss]
yes I-nom 1SG-must-Pres

04 AC: [Sonst war jetzt] bin jetzt zu spät dran huhu.
otherwise 3SG-be-Past now 1SG-be-Pres now too late on that

05 AD: Ja ich muss au' 'nunter gehen und die Caren
yes I-nom 1SG-must-Pres also down go-Inf and the-acc Caren

06 abholen.
pick up-Inf

((省略))

07 AC: ah, (0.4) mir gefällt's einfach besser.
ah I-dat 3SG-like -Pres it-nom simply better

08→AD: O ↓ kay .

okay

09 AC: Ge[nau]
exactly

10 AD: [Also] ich lass dich dann, geh? Und ich
so I-nom 1SG-let-Pres you-acc then tag question and I-nom

11 ruf.
1SG-call-Future

AC: そろそろ終わらなきゃ

AD: ええ、私も、

AC: でもちょっと遅すぎたわね。ふふ、

AD: うん、私もカレンを迎えに行かなきゃいけないの。

(...)

AC: あー、とにかく気に入ったのよ。

AD: わかった。

AC: その通り。

AD: じゃあ、切るわね。また電話するわ。

(8) では上昇イントネーション、(9) では下降イントネーションが用いられており、両方とも、話し手が話の終わりを示す契機として *okay* が使用されている。同じ「会話を終える」場面に対し、上昇イントネーションと下降イントネーション両方が使用されている。ここでの違いは、「話の終了」が予定されていたものであるかどうかにある。(8) では、突然、話を終えることを *okay* の後に宣言しており、対して (9) では、*okay* が発話される前の 01 行目で既に話を終えることを話している。どちらも、*okay* を境に話が終わりに向かっている点は共通するが、上昇イントネーションが用いられる (8) では話し手が「話を終える」ことを表明している場面の変更を行うため、強い意思表示が必要となるのに対し、下降イントネーションが使用される (9) ではあらかじめ話を終えることを示していたため、「計画通りに」話が進み、聞き手にも受け入れやすいと考えられる。

もう一例、下降イントネーションが使用される例について考察する。

(3) (再掲) [Callfriend 6136]

01 T: Wartest du mal kurz? ((英語で他の方向に向かって話しかける))

2SG-wait-Pres you-nom mod short

02 T: Thank you.

03 U: hh.

04→T: O↓kay

okay

05 U: [hehehehehehe]

06 T: [Here we go, again.]

07 U: hehehehehe.

08 T: Nicht zu glauben.

not to believe-Inf

09 (1.0)

10→T: h: ((ため息)) Na, o↓kay.

well okay

11 U: Ja ja.

yes yes

T: ちょっと待って。

T: ありがとう。
 U: ふふ、
 T: オッケー。
 U: はははははは
 T: 話しましょう、もう一度。信じられない。
 T: ふー、ね、オッケー。
 U: うんうん。

(3)では下降イントネーションが使用されているが、話し手が電話中に他の人物と話さなければならず、それが終わった後に、聞き手との会話ができるということを明言している。この時、Tは間を空けて、かつため息をついて二回も *okay* を用い、*okay* を使用した後で、発話することをせず、U が話を始めるのを待っている。その後、08 行目で二度目の *okay* が発話された後に、U が話を続ける。(3) では、話し手は聞き手に話を続けてもらうことを重視しており、(8) と異なり、(3) では聞き手の話を重視し、意図していることが分かる。

下降イントネーションの用いられる (3) や (9) では、話し手が聞き手に話をする 것을求めており、上昇イントネーションの用いられる (8) では、話し手が話を先導している。このように、上昇イントネーションは、話し手が話を先導している時に使用され、話し手の意見が重視される時に使用される。対して下降イントネーションは、聞き手が話を先導する際に使用されていた。

3.2.5 考察のまとめ

ここまでの考察内容を以下の表 2 にまとめる。

表 2 働き別のイントネーションの差異

	I	II	III
上昇イントネーション	決定権が話し手	話し手の意図が重視	話し手が話を先導
下降イントネーション	決定権が聞き手	聞き手の意図が重視	聞き手が話を先導

以上のように、I、II、IIIに対してはそれぞれ、上昇イントネーションの *okay* と下降イントネーションの *okay* の両方が使用されうるが、それぞれは話し手と聞き手どちらの意図が重視され、どちらが話を先導するかによって使い分けがなされていると考えられる。つまり、話し手が会話を先導し、話し手の意図が重視される場合には上昇イントネーションの *okay* が使用され、聞き手が話を先導し、聞き手の意図が重視される場合には下降イントネーションの *okay* が使用されると考えられる。

3.3 コミュニケーションが滞る文例

前節での考察結果をより詳しく検討するために、コミュニケーションが失敗している場合に注目する。これらの失敗が起こる原因と、上昇・下降イントネーションそれぞれの機能に対応するかを検討する。

コミュニケーションが失敗した文例とは、okay の発話後に会話が續かないなど、会話が滞るものが当たる。以下、okay の後に 1 秒以上の間が空く文例について考察し、okay 後のコミュニケーションの失敗の理由が表 2 の考察結果に即しているかどうかを示す。

まず以下に、コミュニケーションが滞る文例を提示する。

(10) [Callfriend 4525]

- 01 G: Da hast du es.
there 2SG-have-Pres you-nom it-acc
- 02→H: hhuhuhuhu [ah O ↑ kay].
ah okay
- 03 G: [Jetzt weißt] du Bescheid.
now 2SG-know-Pres you-nom decision
- 04 G: huhu
- 05 H: huhu
- 06→ (1.8)
- 07 G: .h Ähm, ja >Du hattest die englische Message
ahm yes you-nom 2SG-have-Past the-acc English message
- 08: auch in der Leitung, oder?<
also in the-dat leading tag question
- G: つまりそういうことだ。
- H: ふふふふふふ、あー、分かった。
- G: これで分かったね。
- G: ふふ、
- H: ふふ、
- G: あー、うん。君は電話で英語のメッセージを聞いたでしょ？

(10) では上昇イントネーションが使用されている。okay と同時発話で 03 行目に G の発話があり、okay が無視された場合も考えられる。06 行目の 1.8 秒の間の後、後続発話が聞き手によりなされている。

(5) (再掲) [Callfriend 6136]

- 01 U: Na ja.
well yes

- 02 T: Na ja, toll. hh
well yes nice
- 03 (0.8)
- 04 T: Abe::r, ahm, also in den, den, Dingen, was ich davor
but ahm thus in the-dat the-dat things what I-nom before that
- 05 gekriegt habe, haben sie abergeschrieben, (0.5)ahm(0.6) =
get-p.p. 1SG-have-Pres 3PL-have-Pres they but write-p.p. ahm
- 06 da:ss, (0.9)ahmmit Namen und so vertraulich [umgegangen wird.]
that ahm with names and so confidential deal-p.p. aux-passiv
- 07 U: [Hm hm hm]
h'm h'm h'm
- 08→U: Na ja. O↑kay.
well yes okay
- 09 (1.5)
- 10 T: Also ich meine, was, was wollen sie dann
that is I-nom 1SG-mean-Pres what what 3PL-want-Pres they-nom then
- 11 veröffentlichen?
publish-Inf
- U: ええと、
- T: うん、素敵ね。
- T: でも、ええと、つまり、もらったのには書いていたけど、あー、えーと、名前は信用して扱われるって。
- U: うん、うん、うん。まあね、わかった。
- T: つまり、思うに、何を公にするつもりなの？

(5) でも上昇イントネーションが使用されている。U が T から不信感を表され、U の声色が低くなっており、雰囲気が重くなっていることが分かる。後続発話は聞き手によりなされている。

(3) (再掲) [Callfriend 6136]

- 01 T: Wartest du mal kurz? ((英語で他の方向に向かって話しかける))
2SG-wait-Pres you-nom mod short
- 02 T: Thank you.
- 03 U: hh.
- 04→T: O↓kay
okay
- 05 U: [hehehehehehe]

- 06 T: [Here we go, again.]
 07 U: hehehehehe.
 08 T: nicht zu glauben.
 not to believe-Inf
 09→ (1.0)
 10 T: h: ((ため息)) Na, o ↓ kay.
 well okay
 11 U: Ja ja.
 yes yes
 T: ちょっと待って。
 T: ありがとう。
 U: ふふ、
 T: オッケー。
 U: はははははは
 T: 話しましょう、もう一度。信じられない。
 T: ふー、ね、オッケー。
 U: うんうん。

(3) はまず、04 行目で下降イントネーションが使用され、T が話を再開できることを告げている。しかしなおも笑い続ける聞き手にため息をつき、二度にわたり okay を下降イントネーションで使用し、その後、発話を続けることはしない。

以上 (3)、(5)、(10) では、それぞれ okay の後に長い間が空いている。先述の表 2 の考察から見ると、(5)、(10) は上昇イントネーションであるため本来は話し手が自身の意図の通りに話を進め、話し手が後続発話を行うはずだが、後続発話は聞き手により行われている。また、(3) は U からの発話を待ち、下降イントネーションの okay が二回にわたり使用され、話し手 U が話を続けることはしない。このため、(3)、(5)、(10) は、対話参加者が okay のイントネーションから予想し、期待した人物が発話を行わなかったことから、間が空くことになったのではないかと考えられる。

したがって、後続発話に間が空き、コミュニケーションがうまくいかない文例はどれも、表 2 のイントネーションの違いによって、後続発話を行うと期待される人物と反対の人物が後続発話を行っていた。

4. 映画言語における okay

本節では、自然発話での用法との比較対象として、映画に出現する okay について確認する。対象とした映画は計 5 本、約 8 時間である。時代設定が現代であり、ドイツ人の日常を描いた作品を選んだ。これは、自然発話の言語資料と比較するために、登場人物同士の日常会話のデータが必要だったからであり、また、現代の映画を選んだのは、史実を描

いた映画には現代の言語使用が適用されない場合があるからである。

映画言語でも自然発話と同様の分析を行ったところ、I - IIIの働きが見られた。映画における用例数は以下の表 3 の通りである。

表 3 映画における okay の出現数

	I	II	III	総計
上昇	10 (4)	5 (1)	11(1)	26
下降	3 (1)	8	4 (1)	15

自然発話と異なり、出現数としては上昇イントネーションが多かった。表 3 の () 内の数は、表 2 と異なる使い分けがなされていた文例の数である。

映画でも自然発話と同様に I - IIIの分類によって考察を行ったところ、話し手と聞き手の意図と話し手と聞き手どちらが話を先導するかの違いによってイントネーションの使い分けがなされ、文例の大部分は自然発話の使い分けに従っていた。しかしながら、映画言語においては以下の文例 (11)、(12) のように、この使い分けに従わないものもあった。以下では、これら表 2 の分類に従わない特殊な文例から、映画特有の okay の使い分けについて考察する。

(11) [Bella Martha]

01 M: Bon Appetit.

good appetite

02 (9.8)

03 L: Ich möchte lieber nichts essen.

I-nom 1SG-want-Pres better nothing eat-Inf

04 (7.2)((M が手に取ったフォークを置く))

05 M: Möchtest du vielleicht was anderes?

2SG-want-Pres you-nom maybe what other

06 (5.5)((L が首を横に振る))

07 M: Hast du denn gar keinen Hunger?

2SG-have-Pres you-nom then at all no hunger

08 (5.9)((L が首を横に振る))

09 L: Darf ich jetzt wieder in mein Zimmer?

1SG-be allowed-Pres I-nom now again in my-acc room

10 (3.7)

11→M: O↓kay .

okay

M: おあがりなさい。

L: 食べたくない。

M: 他のものもいい？なら、全くおなかがすいてないの？

L: もう部屋に戻ってもいい？

M: いいわよ。

(12) [Oh Boy]

01 F: Jetzt geraus, geraus, Alter. ((省略))

now go out-Imp go out-Imp young man-nom

02 Gehe. Geh schnell los. Sonst werde ich hysterisch.

go-Imp go-Imp quick away otherwise 1SG-become-Pres I-nom hysterical

03 Geh.

go-Imp

04→A: O ↑ kay.

okay

05 (6.8) ((A が扉の方に歩く))

06 A: Julika:

Julika

07 (0.4)

08 F: Ich hab gesagt, du sollst dich verpissen!

I-nom 1SG-have-Pres say-p.p. you-nom 2SG-should-Pres yourself go away-Inf

F: 今すぐ出てって、出てってよ、あんた。(…) 行って、すぐに行って。ヒステリーを起こすわよ。行って。

A: 分かったよ。ユーリカ、

F: 私は出て行けって言ったのよ！

(11) と (12) は両者とも、I の「聞き手の発言の了承」の働きを持つ *okay* が使用されている文例である。(11) では、叔母である M が、姪である L から「部屋に戻ってもいいか」と問われた際に、下降イントネーションで *okay* を使用している。自然発話では子どもの発言を保護者が了承する場合には、上昇イントネーションで了承されていたが、ここでは下降イントネーションが使用されていた。

(12) では、A が仲の良い女性の F と口論になり、F が怒って A に出ていくように言う場面である。A は F がなぜ怒ったのか分かっておらず、困ったように A をなだめる言葉を言い募っているが、F はそれを聞こうとはせず、A は途方に暮れている。ここでは出ていくように命令した F に対し、A は *okay* で答えており、これは対話相手からの指示であるため、自然発話では下降イントネーションが使用されるのが自然である。しかしながら、ここでは上昇イントネーションが用いられている。

それぞれの文例について詳細に考察する。まず (11) では、L の母親が事故で亡くなり、

父親も分からないために、Lが母親の妹であるMに引き取られた直後の会話である。Mは独身で子どももおらず、Lとの接し方が分からず、会話をしようとはしていないがうまくいっていない。Lもまた、母親を亡くしたショックから、Mと会話しようとしていない。MはLに積極的に話しかけ、この文例が出現した以外の場面でもLが食事をとらないことを心配している描写があり、Lとの会話を望んでいることが分かる。したがって、(11)ではLは食事をとることを拒否し、Mと離れて自室に戻ろうとするが、Mにとってこれは望ましい事ではない。そのため、Lが部屋に戻ることはMに決定権があるものの、積極的な受諾ではないことを示すために、「聞き手からの指示が強制」されることを示す下降イントネーションを用い、Lが部屋に戻ることを残念がっていることを示したのではないかと考えられる。

次に(12)について説明する。AとFは、学校の卒業後に久しぶりに再会した同級生同士という間柄である。Fは学生時代にAに片思いをしていたことを告げており、この発話前にFを守って怪我をしたAをFが介抱したり、抱擁したりするなど、恋愛関係になりそうな雰囲気が示唆されている。さらに、Aはこの発話以前に、怪我をしたことをFに格好悪く思われていないかを心配している発話をしており、Fによく見られること、Fと仲良くなることを期待している。(12)の発話前にFが怒り、理由もわからず一方的に激しくののしられた後も、Aはokayと了承した後にFの名前を読んで発話を始めようとしている。その際の声色が低く、落ち着いたものであるためFと口論をするのではなく、なだめようとしていると考えられる。このため、対話相手の言うことを聞いているものの、下降イントネーションを用いてそのまま従うのではなく、「話し手に決定権がある」上昇イントネーションを用い、自分の意思が尊重されることを伝え、発話権を獲得しようすることに重点を置いていると考えられる。

この他の文例でも、話し手が自由意思を主張することを望む時や、内容に対して乗り気であり、肯定的な反応を見せる時などでは、自然発話では下降イントネーションが用いられる場合でも上昇イントネーションが用いられており、自然発話では上昇イントネーションが用いられる場合でも、話し手が物事をいやいや行う時などでは、下降イントネーションが用いられることがあった。つまり、話し手の自由意思が尊重されるか否かではなく、登場人物の感情、意図をより明確に表示するためにイントネーションの使い分けがなされていた。

5. 自然発話と映画言語における okay

本節では、自然発話と映画言語に出現した okay の用法の差異を比較し、その差異に見られる話し言葉としての不自然性への作為性の影響について述べる。

5.1 映画言語の特徴

自然発話と異なり、映画言語は即時的な発話ではなく、あらかじめ準備された台本に書かれた言葉を発話している。Koch & Oesterreicher (1985), Biber (1988) では、話し言葉を

単純に話された音声言語と定義することはできないとしており、その中でも演劇など、発話以前に話し言葉として書かれている音声言語は、話し言葉性の強い音声言語に分類されている⁶。すなわち、音声言語であり、自然発話に近いものの、即時的でなく、長時間の推敲時間を置いてから発話されている点で、自然発話と異なっている。また、映画には遍的に全てを見通せる位置に観客がおり、台詞は登場人物同士のものでありながら、同時に観客にも向けられ、製作者は画面の構成、台詞などにわたって演出を行っている(加藤 2015: 97-98, 長沼 2011: 37)。映画においては、「スクリーン上の台詞は、その人物の行動の延長」であり(ホイッタカー 1983: 121)、出演者が登場人物の役を演じ、その登場人物に特定の台詞を言わせることにより、登場人物の特性、人柄や素性などを伝え、観客に意思表示が理解されることが重視される。したがって、作り手は自然発話から連想された言語使用のイメージを映画の台詞において具現化することで、状況や登場人物の特性を観客に伝えており、それを観客が自身の言語知識を用いて受容していると考えられる。

話し言葉の定義、「不完全性／冗長性が許容され、発話時の状況、話し手の感情表現が現れる1回限りの相互的な発話」(Ochs 1979, Chafe 1982, 工藤ほか 1995)に照らし合わせると、文字化された文書を読み上げている点では自然な話し言葉とは異なるが、対話相手に向けられる点、話し手の感情が現れる点は自然な話し言葉と合致している。すなわち、文字化されながら「話し言葉として作成・発話されている」という作為性から、話し言葉としての不自然さが生み出されていると考えられる。

次節では、Callfriendにおける自然発話、自然に産出された話し言葉と、「話し言葉として作り出された言葉」である映画言語という、話し言葉の特徴を持った二種類の言葉と比較することで、「話し言葉の自然さ」を生み出す要因を確認する。

5.2 okayの用法に見られる差異

自然発話と映画におけるokayを比較する。まず、使い分けの条件について議論する。

自然発話における上昇イントネーションと下降イントネーションは、表2に示した通り、「話し手／聞き手が会話を先導、話し手／聞き手の意見が重視」という観点から使い分けられる。映画言語では、4節にて示したように、大半はこの使い分けに従っているが、話し手が積極的な行動をする際には上昇イントネーション、話し手が非積極的な行動をする際には下降イントネーションが使用されており、話し手のその時の意図と感情がより強く表出されるように使い分けがなされている場合があった。製作者は、登場人物の発話と感情の表明に重きを置き、発話を選択していると考えられ、「話し手が話を先導」することと、「話し手の積極性」、「聞き手が話を先導」することと、「話し手の非積極性」が結びつき、登場人物の感情の表出、それに即しての意思表示が行われていると考えられる。

これに加えて、文例数についても考察する。表1、表3から文例の出現数を確認すると、自然発話では上昇イントネーションが9例、下降イントネーションが37例で、下降イントネーションの方が多かったのに対し、映画では上昇イントネーションが26例、下降イントネーションが15例で、上昇イントネーションの出現数が多いところに差異があった。上昇

イントネーションと下降イントネーションの出現数の割合が異なるのは、使用目的と描く場面が異なるからであると考えられる。自然発話では、okay が使用されるのは話し手が聞き手からの意思伝達を受け取り、了承する場面が多かった。対して映画では、話し手が意思伝達を行うのに伴い、okay が使用されることが多かった。5.1 節で議論したとおり、映画においては製作者が登場人物に台詞を言わせることで意思表示をさせ、映画で主張するメッセージを伝える。このため、映画では観客が見ることが常に意識されており、登場人物の意思表示のなされる上昇イントネーションの okay が頻繁に使用されることが考えられる。対して自然発話では、表 1、表 2 に示されたように、聞き手の意思を重視する下降イントネーションが頻繁に使用されている。自然発話では、言語は話し手と聞き手の間のコミュニケーションのために使用され、コミュニケーションの円滑化を図っていると考えられる。したがって、話し手が聞き手との対話、また、聞き手を受容していることを示す、つまり、聞き手の意思伝達が話し手によって受容されていることを示すために下降イントネーションが頻繁に使用されることが考えられる。okay はイントネーションによって、話し手志向と聞き手志向という異なる側面を持っており、映画と自然発話それぞれが重視し、使用している側面が異なると考えられる。

映画言語の okay では登場人物の感情や関連性の表明がより強くなされているが、この「感情表現」は話し言葉の特質である。ゆえに、映画言語はより強く「話し言葉らしく」作られていると考えられる。したがって、映画言語は場面および登場人物同士の関連性を主張するために、自然発話における言語知識を過剰適用している点が自然発話と異なっており、ここに不自然さが現れると考えられる。

6. まとめと展望

本稿では、ドイツ語の応答詞 okay を考察対象とし、okay について、話し手と聞き手の意図と発話の連関について考察した。okay は話し手の意思伝達に従い、イントネーションによる使い分けがなされることが判明した。これに伴い、映画言語と自然発話における okay の用法の違いについても論じた。映画発話は、話し手の感情が自然発話より多く影響し、また、コミュニケーションを重視する自然発話と異なり、登場人物の意思の伝達に重きを置くために、発話の自然さが失われ、自然発話と用法が異なってくると考えられる。

今回の考察では、okay に関してイントネーションによる以上のような使い分けの結果を導き出した。同様の働きをする他の応答詞についても、イントネーションによる使い分けとして同様の傾向があると考えられる。今後は、achso (英: ah so)、gut (英: good) など、他の応答詞についても考察を行い、包括的な考察結果を導き出す。

注

1. 以降の考察において、「話し手」とは okay の発話者を指し、「聞き手」とは okay と言われた者を指す。
2. 本稿で扱った文例は、話者の発話をそのまま書き起こしたものであり、文法的な誤り

が観察されることがある。例えば、文例 (2) での、G: Also, >jetzt kann (sich) man< sogar über Waffenschmuggel und Mädchenhandel unterhalten. には、()で示されるように sich が必要であるが、本稿では話し手が話す通りに記述している。

3. 文例に使用したアノテーション記号を以下に記す。これらの記号は Gail Jefferson によるものに基本的に準拠した。

[	同時発話の開始
]	同時発話の終了
:	長音 (: が多いほど長い)
h	呼気／笑い
.h	吸気音
=	複数行にまたがる同一話者のターン
(.)	0.2 秒未満の沈黙
(0.5)	0.2 秒以上の沈黙。() 内の数がその秒数
(...)	聞き取ることのできない発話
,	発話の継続
↑ 語句	上昇音調
↓ 語句	下降音調
?	語尾の上昇
><	発話のスピードが速い
<u>語句</u>	強勢
° 語句°	小さな声の発話
(())	発話中に行われた行動、注記
→	考察対象の出現位置

4. 個人情報の保護のため、実際の発話と異なった名前を使用している。
5. T は「公的に公開される」と述べており、これは「録音された会話がインターネット上で公開される」ということを意図している。しかし、U は名前などの個人情報が公開されると勘違いをしており、「公開」という単語から齟齬が生じていると考えられる。
6. Koch & Oesterreicher (1985), Biber (1986) は、話し言葉の特徴は音声言語というだけではなく、文字言語でも話し言葉に近い言語資料や、音声言語でも書き言葉に近い言語資料が存在するとしている。例えば、印刷されたインタビューは、文字言語であるが、参与者同士の対話を書き起こしているため、話し言葉に近い体系を持ち、対して演説などは原稿が作られてから発話され、音声言語だが書き言葉に近い体系を持つ。このため、音声言語であることだけが話し言葉の特徴づける要素ではないとされる。

参考文献

- Biber, Douglas. 1988. *Variation across Speech and Writing*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Chafe, Wallace. 1982. Integration and Involvement in Speaking, Writing and Oral Literature. In Deborah Tannen (ed.), *Spoken and Written Language : Exploring Orality and Literacy*, 35-53. Norwood, NJ: Ablex.
- Deppermann, Arnulf. 2009. Verstehensdokumentationen zur Phänomologie von Verstehen in der Interaktion, *Deutsche Sprache* 36 : 220-245.
- 加藤幹郎. 2015. 『映画とは何か 映画学講義』 東京: 文遊社.
- Koch, Peter and Oesterreicher, Wulf. 1985. Sprache der Nähe - Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. *Romanistisches Jahrbuch* 36 : 15-43.
- 工藤浩・小林賢次・真田信治・鈴木泰・田中穂積・土岐哲・仁田義雄・畠弘己・林史典・村木新次郎・山梨正明. 1995. 『日本語要説』 東京: ひつじ書房.
- 森大毅・前川喜久雄・粕谷英樹. 2014. 『音響サイエンスシリーズ 12 音声は何を伝えているか 感情・パラ言語情報・個人性の音声科学』 東京: コロナ社.
- 長沼光彦 2011. 「映画のことば」『京都ノートルダム女子大学言語文化研究』 2: 32-50.
- Ochs, Elinor. 1979. Planned and Unplanned Discourse. *Syntax and Semantics* 12: 51-80.
- Pheby, John. 1975. *Intonation und Grammatik im Deutschen*. Berlin: Akademie-Verlag.
- ホイッタカー, ロッド (著), 池田博・横川真顕 (訳) 1983. 『映画の言語』 東京: 法政大学出版局. (Whitaker, Rod. 1970. *The Language of Film*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.)

辞書、コーパスなど

- Bibliographisches Institut GmbH (ed.) 2007⁶. Duden Deutsches Universalwörterbuch.
- 国松孝二ほか (編) 2000. 『大独和辞典』 第二版、小学館.
- MacWhinney, B. 2007. The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1.(163-180). Houndmills: Palgrave-Macmillan.

映画

- Becker, Wolfgang 監督 2003. *Good Bye, Lenin!*, ギャガ.
- Nettelbeck, Sandra 監督 2001. *Bella Martha*, アミューズピクチャーズ.
- Ole Gertner, Jan 監督 2014. *Oh, Boy*, セテラ・インターナショナル.
- Weingartner, Hans 監督 2004. *Die fetten Jahre sind vorbei*, キネティック＝コムストック.
- Wigand, Wolfgang 監督 2014. *Omamamia*, エデン.

The Selection and the Function of the Answer Particle “okay” in German

Eriko Kimura

This article aims to clarify the difference of meaning expressed by a rising and a falling intonation in the case of the answer particle “okay” in German. Through the method of conversational analysis, “okay” with the rising intonation is compared with that with the falling intonation according to the situation and intention of the speaker. In addition, a comparison with scripted conversations in movies will reveal where naturalness of speech comes from.

In the telephone conversation, the falling intonation is used more often. The speaker uses the rising intonation when he leads the conversation and puts emphasis on the intention of the speaker, and the falling intonation when the hearer leads the conversation and puts emphasis on the intention of the hearer. However, in the movie conversation, the rising intonation is used more often. While actors use the intonation in much the same way as in the telephone conversation, there are some exceptional cases. In the movie conversation, the rising intonation is used when the speaker is enthusiastic for the content of the conversation, and the falling intonation is used when the speaker is not enthusiastic. Consequently, the speaker conveys his intention by the difference of the intonation.

Producers of movies let actors say lines to express their opinions. In the movie, they use “okay” to claim their opinions, and in the telephone conversation, we use “okay” to communicate with others. Namely, movie conversations are influenced more by the sentiment of the speaker. This difference leads to unnatural speeches found in movies.